

# 違法伐採の後を追いかけて

マッテワツカン

インドネシアの森林における違法伐採行為については、国内外のメディアがいろいろな形で監視を行っている。そうしたジャーナリストイックな報告では、一般に、法や規則の適用が不十分で、中央あるいは地方レベルでの特定人物の「後ろ盾」が強いため、違法伐採行為への取り締りが難しく、年間六億ドルもの国家損失をもたらしている、と結論づけている。

## ●社会経済調査で村へ

二〇〇六年九月、筆者は、南スラウエシ州東ルウ県トウティ郡トカリンボ村に入った。トウティ湖の南に位置するこの村には一五〇世帯が住み、住民は農業、漁業、木材伐採業、沈香 (galam) (訳注1) 採取業、ダマール (damar) (訳注2) 樹脂採取業などに従事している。

彼らの活動の中心になっているのは、村の中のベアウ地区である。ここまで、南スラウエシ州の州都マカッサルからは、陸路で約一二時間もかかる。とにかく疲労困憊の旅であった。

この村の住民は米、胡椒、丁子、カカオ

を植えている。雨季が来るたびに、トウティ湖の水が湖岸から一〇〇メートルぐらいまで溢れ、湖の周りがある水田を水浸しにする。このため、被害を被る農民たちは、漁労や農園作物栽培など、ほかの作業から生計を得なければならなくなる。

筆者がここへ来た本来の目的は、住民が社会的・経済的にどれぐらい森林に依存しているかを知るために、東ルウ県の森林地域に住む住民の社会経済マッピングを行うことであった。そして、住民へのインタビューに加えて、ベアウ地区から約二五キロ離れた森林を訪れる必要があった。トカリンボ村の書記であるサリムによれば、その森林へ行くにはトウティ湖を渡らなければならない。そのほうが早いだけでなく、陸路がまだ整備されていないからである。すでに夕暮れどきとなったので、出発は明朝と決めた。しかも、夕方には、湖を渡るための船を漕ぐ船頭がいなかったのである。さらに、夕方は波が出るとの話であった。

## ●トウティ湖について

翌朝八時三〇分、我々はシャフリルとい

う住民から借りたスピード・ボートの船上にいた。船主のシャフリル以外に、四人が同行する。村書記のサリムと三人の村の青年たち(シヨリヒン、シャイフル、ラフマツト)である。森林を歩き回るので一緒に行って欲しいと、私のほうから土地勘のある彼らにお願いしたのである。それに、地元の人々ならいろいろと付加的な情報も教えてくれることだろう。荷物はそれほど多くない。今回の旅はわずか一泊なのだ。何も問題がなければ、明日の昼にはベアウ地区へ戻っているはずである。

風を切って進むスピード・ボートの上で、彼らにトウティ湖のことをいろいろ聞いてみた。彼らは代わる代わる話をしてくれる。「湖の広さは約五八五平方キロメートル、水深は九五メートルで、インドネシアではトバ湖に次いで二番目に大きい湖なのだ」と村書記のサリムがいう。

東ルウ県には三つの湖がある。マタノ湖、マハロナ湖、そしてこのトウティ湖である。この三つの湖は住民の憩いの場となっており、その景色は美しく、まだ自然もたくさん残っていて、清く澄んでいる。

シャフリルのいうように、トウティ湖は漁民にとって大事な漁場である。漁民は通常、釣り竿またはバガン（訳注3）で魚を獲る。漁民が探し求めるのは、ドゥイドゥイ（ikan dudu）、別名ジュルン・ジュルン（ikan jurung-jurung）という名前の魚である（訳注4）。この魚は干物にして売るほかとくに、口が黒、黄、オレンジなど様々な色をしているので、観賞魚として捕まえる者もいるそうである。

シャイフルの話はまた違った。トウティ湖では、気をつけないと、とくに湖の周辺で危ない目にあうそう。数カ月前、ティマンブ出身のシランナという名の材木売りが、ワニに襲われて亡くなった。当時、シランナは湖に浮かべた丸太を気持ちよく並べていたが、突然、体長五メートルもの一匹のワニが襲い掛かってきた。シランナは、丸太の合間にワニがすでに隠れて覗いていたことに気づかなかった。四時間経って、ワニに引っ掻かれた傷だらけのシランナの遺体が湖に浮いているのが発見された。

### ●森林のなかの木造小屋

午前一〇時を過ぎて、スピード・ボートはようやくランティブ川の上流に船を着けた。それまで他の場所で何度か上陸しようとしたが、失敗していた。湖の淵に最初に足をつけたサリムに助けられながら、一人また一人と船から下りた。

陸に下りてから、あたりを見回してみた。

湖の淵には朽ちた小枝、枯れ葉、材木の切れ端、プラスチックごみなどがあちこちに散らばっていた。自分が立っているところから約五〇メートル離れたところに、様々な樹種の木々が集まって並んでいるのが見えた。美しく分厚い森の景色だった。

ちよつと中に突き出たような格好で、ランティブ川はトカリンボの陸地を分けながら、保護林の中まで入っていく。この川は浅く、水は澄んでおり、そこにはたくさん小さな魚が生息していた。しかし、この景色を遮っているのが材木であり、川が材木でいっぱいなのであった。サリムが言うには、これらの材木はこの森林で活動している違法伐採の産物である。トウティ湖の周辺のほぼすべての川が、伐採された材木の水上置き場と化している。これらの材木は保護林からトラックを使って運び出された後、川で水に浸りながら、運搬されるのを待っているのである。

そこからさほど遠くないところで、森林の木を使った小さな高床式住居のような軒の木造小屋を見つけた。マカッサルの治安見張り小屋（訳注5）とよく似たつくりをしているが、屋根はニツパ椰子で葺かれていた。小屋の前には、かまど、鍋、皿、コップなど、その他料理用具が置かれている。小屋の中には、枕、サルン（腰巻布）、ゴザ、何枚かの汚れた衣服、櫛などがあつた。この小屋はきつと、伐採業者の基地になつているに違いない。私はそう思ったの

だが、サリムの話の話を聞くと、どうも違っているらしいということが分かった。

「この小屋はジュフリという人のものだ。彼はバンティラン村の人で、この森でダマール樹脂を採取しているのだよ。木材伐採業者はこんな近くにベース・キャンプを置かない。他人に気づかれないように、普通は森の奥に造るものだよ」と、サリムが言う。たしかにそのとおりだ。実際、小屋の辺りには、中身を調べたわけではないが、乾燥させたダマール樹脂の入ったいくつものカゴが置かれていた。私は、米や食料がカゴに入っているのかと思ったのだ。

サリムは、新しく小屋を造るのも面倒なので、この小屋を我々のベース・キャンプとして使うことに決めた。きつと、小屋の主のジュフリも我々の来訪を歓迎してくれはらずだ、というのだ。森のなかで夜を過ごす友人になるというだけでなく、ジュフリはサリムとも知り合いなので、問題はな

いということであった。この選択は、私にとって実はとても有益だった。無料で泊まれる場所が用意されただけでなく、実は、この小屋の主は、頻繁にここで寝泊りし、ときには何週間も滞在することもあるので、森林の状態についてたくさん知識を持っていたのである。

### ●違法伐採業者についての話

それほど長く待つ間もなく、ジュフリと呼ばれる人と会うことになった。夕方、ダ

マール樹脂を忙しく採取している最中の彼と出会った。そして、サリムは、私がインタビューしたがっているということも含めて、彼にすべてを話した。彼はニッコリと微笑み、私のほうを見て、急いで近づき、握手をした。我々は長い間話をした。とくに、森林での活動について話をした。

ベース・キャンプへの帰り道は、木材伐採業者が通るために造った道を歩いた。トラックが通れるように造った道で、木材を積んだトラックが行ったり来たりするのだという。この道はトウテイ湖の畔から始まって、保護林まで数キロの道であった。

本当は、伐採業者の居場所を突き止めるのは簡単なはずだ。なぜなら、こうした道を通って保護林まで行けば、その終点に彼らのベース・キャンプがあるからである。ジュフリは木材伐採業者について次のように語ってくれた。彼らの人数は十数人。今現在、まだ保護林のなかにいる。でも、今回の我々のような集団がいる場合には、通常、彼らは姿を現さない。森林監視員チームが無許可の木材伐採を摘発しに来た、と警戒するからである。

集団がいる間は、彼らは森のなかでじっとしている。食料を十分持っている、長いこと森の中に留まっていられるのである。他方、我々のような集団は、通常の場合、長期間にわたって森の中に滞在などしない。長くてせいぜい一週間程度である。

木材伐採業者は、大半がベアウ地区に住

む住民である。そして、彼らが「ボス」と呼ぶ親方は、この場所の人々から尊敬を集めている有力者の近しい親族なのである。おそらく、それが理由で彼らを捕まえるのが難しいのであろう。それどころか、ジュフリ自身が、彼らと家族関係にあるということだった。

伐採した木材はすべてランティブ川やトカリンボ村周辺の他の河川の上流で水に浸ける。木材は、その川からカティンティン (Katintin) と呼ばれる小舟で曳くか、または、大きな筏にしてティマンブの港まで運ばれていく。そこでそれらの木材は、彼らのスポンサーとなる木材商に買い取られていくのである。

シャリヒンもジュフリの話に同調する。彼曰く、トカリンボ村の若者たちの何人かは、現金収入が欲しくて森で木材を伐採している。雨季にトウテイ湖の水が溢れて、水田や畑がもはや豊かな恵みをもたらしてくれるとは望めなくなったことで、若者たちは伐採へと走る。そんな彼らに道具を提供し、賃金を払ってくれる材木業者が存在する。若者たちが伐採した木材は、その業者のものになるのである。

午後一時四五分頃、我々はランティブを発ち、ベアウ地区へ向かった。ジュフリからはたくさんの情報をもたらした。そのうちの一つは、材木業者から資金提供を受けた地元住民が、森林で無秩序に木材を伐採している、という話だった。ここ以外にも、

ワスボンダ郡カワタ村やマリリ郡ハラパン村など、東ルウ島の他の場所でも、同じような話に出くわすのであった。

(Matthews / NGO活動家)

(訳注1) 南部ベトナムを原産とするジンチョウゲ科の常緑高木で、心材と根材を香木として利用するほか、土中に埋めて腐敗させてそれから採取した樹脂もこの名で呼ばれる。良質のものは伽羅と称される。

(訳注2) フタバガキ科のコーパル樹脂を産する針葉樹で、ナンヨウスギとも呼ばれる。ここから採れるダマール樹脂はペンキやワニスの原料となるほか、油分が多いため、地元では灯りをとる材料としても使われた。木材自体は、アガチスという名の南洋材として一般に知られている。

(訳注3) バガンとは、海上に設置された漁のための作業台のことで、海底が浅い場合には固定式(ジャカルタ北岸など)、深い場合には船の形態を採る移動式(南スラウエシ周辺など)になる。夜に海中へ網を沈め、電灯で魚を誘き寄せ、一網打尽に掬い取る方法をとる。バガン漁は満月時には行われない。とくに移動式バガン漁と沿岸漁業との間で、紛争が生じることがある。

(訳注4) 一般名称がジュールン・ジュールンで、現地ではドウィ・ドウィと呼ぶ。学名は "Dermogenys megarrhamphus" で、英語名は "talback"。ダツ目のサヨリの仲間である。国際自然保護連合 (IUCN) のレ

ッドリストでは「準絶滅危惧」(LR/N T)に指定されている。

(訳注5) ポス・ロンダ (posonda) と呼ばれる地区ごとに設置された自警のための見張り小屋で、異常事態の際に住民に知らせる木製の警鐘が吊り下げられている場合が多い。ロンダとは、地区の男たちが自警のために夜回りなどを行うこと。

#### 〈訳者による解説〉

筆者のマツテワツカンは、社会経済調査を手がける地元NGOの民主・自治研究所 (LEDO) の中心メンバーとして活躍している。一年の多くの期間をスラウエシの村に入って過ごしており、マカッサルで会うと、たくさんのフィールドの話をしてくれる。

今回は、森林伐採に関わる話であるが、インドネシアは世界で最速の森林喪失国のありがたくない評判を国際機関から受けている。世界食糧機関 (FAO) のデータによると、二〇〇〇～二〇〇五年の間に、インドネシアでは、毎年一八〇万ヘクタール、毎日約五一平方キロメートル、一時間ごとにサッカー場三〇〇個分の森林がなくなっている計算になる。

インドネシア政府 (林業省) のデータによると、一九九七～二〇〇〇年の間はよりひどい毎年二八四万ヘクタールの喪失であり、現在の状況は若干改善しているように見えるが、それで満足できるわけではない。

過去五五年でみると、一九五〇年に一億六二〇〇万ヘクタールあったインドネシアの森林面積は、二〇〇五年時点で八五〇〇万ヘクタールへと半減した。最もひどいのはスマトラで、一九五〇年の三三四〇万ヘクタールが二〇〇五年には一三五〇万ヘクタールである。本連載の舞台のスラウエシでも、一四七〇万ヘクタールが五五年の間に七八〇万ヘクタールへ減少した。

こうした長いスパンで見ると、森林喪失が最も進んだのは、実は、中央政府の権限で森林が比較的よく守られていたと言われるスハルト時代であった。スハルト時代に喪失した森林面積は四〇〇〇万ヘクタールと言われる。丸太や木材は貴重な輸出商品だったことに加え、一九八〇年代から起こった紙パルプ工業の影響がある。紙パルプ工業はアカシアなどの植林も行うが、原料としては、植林したアカシアではなく原生の熱帯林を使う傾向があったといわれる。植林よりコストが安いからである。

現在では、高騰した石油の代替エネルギーとして、バイオディーゼルの需要が世界的に高まっており、その原料として最も効率的とされるオイルパームに期待が集まっている。世界有数のオイルパーム生産国であるインドネシアでも、スマトラなどを中心に、急ピッチでオイルパーム生産を増加させるべく、農園開発が進められ、森林伐採がどんどん進められている。

二〇〇七年一二月、バリ島で地球温暖化

問題を話し合う国際会議が開かれ、二酸化炭素排出権の売買などが議論された後、京都議定書に続くバリ・ロードマップが合意された。インドネシアとしては、二酸化炭素排出権を先進国へ売ること、地球温暖化防止のための資金・技術を得る目的がある。しかし、地元NGOなどからは、「現場で実際に森林が伐採されている状況は事実上放置され、住民の生活は脅かされ続けるだろう」との懸念が表明されている。

コミュニティ・レベルの営みがグローバルな問題に直結している、という意識は現場ではなかなか感じられまい。飛行機からインドネシアを見れば、まだまだ森林は果てしなくあり、ちよつとぐらゐ森林伐採しても大丈夫、と思うことだろう。自然災害などで現金収入機会を失った住民のところへ「ボス」がやってきて、チェーンソーを使えばカネになると言われたら、藁にもすがり気持ちで住民は森林を伐採し始めることだろう。あるいは、割の悪い農業をやめて木を切り始める者も出てこよう。ヨソ者である我々が、そうした住民を地球温暖化の元凶と簡単に非難できるとは思えない。

資源を使う側の行動変化が森林に生きる住民の行動変化を起こす面もある。住民に森林伐採以外の代替的な現金獲得機会を促すだけでなく、我々の資源の使い方を根本から変える時期が来ているのではないか。

(まつい かずひさ／在マカッサル海外調査員)